

複雑な電車の路線図にもすっかり慣れたもので、フェリシアーノは教鞭をとる大学の最寄駅から目的地の広尾まで、特に困ることもなくすんなりとやってこれた。もう何度も訪れている場所である。駅から出た後もフェリシアーノの足が戸惑うことはない。

ここ数日天気はぐずついていたのだが、今日は見事に晴れていた。まだ夏を抜けたばかりであるが、なんととはなしに空も風も秋を含むようになってい

り高くなり、風もどこかひんやりとしてきたよう

そう思いたいからそう感じるだけだろうかとちらりと
 と思って、フェリシアーノはヴェー、と意味のない
 声を出す。

この国の夏の苛烈さは、何年経っても慣れるもの
 ではない。フェリシアーノは母国でも北に位置する
 街の生まれである。暑さには然程耐性がなかった。

早く本当に秋に切り替わればいいのにと、フェリシ
 アーノはのんびりとした足取りで歩みを進める。途
 中で暑くなつてきて、薄手の上着をばさりと脱いだ。

道で行き交う人々も、まだまだ薄手の服装である。
 暑い寒い勘弁だが、この国の四季は嫌いではな

い。特にこれからの季節、真っ赤に燃えるような紅
 葉が見られるのだ。去年訪れた京都は死ぬほど人
 溢れていたが、伝手もあつてそれは美しい景色を見
 ることが出来た。

「美味しいものもたくさんだしねえ」

フェリシアーノは思わずと言つた風にそう言う、
 機嫌良く笑みを浮かべて歩みを少しばかり速くした。
 なんだかお腹が空いてきた。早くご飯を食べたいと、
 フェリシアーノは跳ねるように角を曲がった。

「ヴェー！菊、ひどいと思わない!？」

開店したばかりの店に入るなり、そう叫んだフェ
 リシアーノに店主の本田菊はあ、と間の抜けた返
 事しか出来なかつた。事情も何も判っていないのだ。
 これが精一杯の返事であろうし、何を言っているだ
 と返されなかつただけ随分と優しい対応である。

フェリシアーノも判っているのか、彼は菊のきよ
 とんとした顔に文句は言わず、定位置であるカウン
 ター席に大人しく腰を下ろした。